

「お国のため」の一言で、全て終わらせられてしまう風潮でした。私は、高等科1年を終えた後、工業学校に行きました。当時、親に「工業学校に通えば徴兵が免除になるから」と勧められたためです。ただ、全ての学年が同じクラスで学んでいたので、途中からは学徒動員で工場に働きに出ることになりました。通学途中では、川越駅西口近辺で空襲警報があり、B29が「バリバリバリ」とすごい音を立てて飛んできて、「危ない！」と地下道に逃げた事がありました。お年寄りには慌てて転び、どんどんその上を人が乗っかり大騒ぎでした。幸い、人的被害はありませんでしたが、このような事は度々あり、いつも「がまんがまん」を合言葉に何

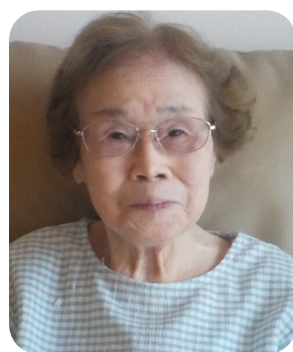
とか日々を過ごしてきました。どこに行っても安全じゃないし、防空壕に入るしか方法が無かったですからね。南畑にも爆弾が落ちたんですよ。B29が何編隊もやってきて、最初に来た編隊から下田の交差点に「照明弾」が落とされ、地面が明るくなったんです。その後、また違う編隊が来て今度は「シュシュシュー」と変な音がして飛行機が飛び去っていき、何の音だったのか不思議がっていました。翌朝、自宅の西の方で「ドカーンドカーン」と大きな音がしました。これは、ある程度時間が経ってから爆発するように仕掛けられたんです。爆発したその場所には、大きさ10メートル前後、高さ1、2メートルの粘土質の山が沢山出来ていて、

もし一歩間違えれば甚大な被害が出ていたと思います。恐ろしくなりました。「戦争なんてやるもんじゃない」の一言に尽きますね。敵も味方も被害を受けるのは一般住民です。

・ 洪谷 豊子さん
昭和4年生まれ(96歳)
終戦を迎えた場所
富士見市南畑

私は、6人兄弟の4番目として南畑に生まれ、戦争中は両親、兄弟と共に南畑で過ごしていました。

戦争中は女学校に通っていましたが、何回か空襲警報があつて校庭



にある小さな防空壕に逃げ込むことがありました。でもその防空壕は、一人しか入れない位小さかったのです。中で小さく身を屈めて入ったり、学校から少し離れたところにあるもう少し大きな防空壕にみんなで逃げ込んだりしたこともありましたが、かなり低空で戦闘機が飛んできて、機内で操縦している人まで見える事もありました。その時は、銃弾が木に当たったような「パラパラ」という音が聞こえて怖くて怖くて「これで死んじゃうのかなあ」と思いつながら時間が過ぎ去るのをただじっと待っていましたね。

女学校では途中から勉強が出来る状況では無かったですね。勤労奉仕が始まり、毎日電車で鶴瀬から朝霞の工場まで働きに出ること

になりました。毎日朝から晩まで立ちっぱなしで、和紙を重ねて機械で裁断する作業をしていました。同級生と一緒に作業をしていましたが、憲兵が見回りに来るし、おしゃべりなんかしないで黙々と作業をしていましたね。あと当時は、自分が何の作業をしているのかよく分からず、ただ作業内容は周囲に漏らしてはいけなかったと言われていました。それが後になって風船爆弾を作る作業に携わっていたと分かったんです。風船爆弾は、約9、000個放たれて推定約1、000個が米本土に届いたと聞いています。知らない間に自分がそれに関わっていたとは……。

二度とあんな思いはしたくないし、戦争はどんな理由があつてもしてはいけません。

平和の大切さ

～戦争体験を聞く～

若杉 利枝さん
昭和5年生まれ(95歳)
終戦を迎えた場所
東京都大田区

私は、大田区の米屋の生まれで6人兄弟の一番上です。戦時中、5人の兄弟と母は神奈川の藤沢へ疎開しましたが、私は学校を転校したくなかったため、父親と2人で大田区に残りました。

当時、品川の女学校まで自転車通っていましたが、2年生の時、



工場へ働きに出ることになりました。運動も勉強も好きだったけど、「もっと学校で勉強したかった」とは不思議と思いませんでした。上から強制的に「行きなさい」という事で、個人の考えなんてない時代だったし、それが当たり前だと思っていました。

工場は、ネジを作る工場です。学生が一つの部屋に集められ、朝から晩まで立ちっぱなしでバリバリを回していました。その当時の楽しみは、お弁当を食べることでした。

空襲警報が鳴って、急いで布団を頭からかぶって外に出て高台に避難したことがあります。

す。その時は「怖い」と思う間もなく逃げるのに必死でした。高台からボーボー燃える街の様子を見て、「あ、自分の家も燃えちゃったのかな」と呆然と眺めていたのをよく覚えています。でも実際は、家の近くが焼け野原になりましたが、幸い自分の家は、ギリギリ無事で胸を撫でおろしました。

ただ、その後も頭の上を爆撃機が通り過ぎて怖い思いをすることが2、3回はありました。工場で働いている時は、工場敷地内にある防空壕に慌てて飛び込んだり、防空壕でお弁当を食べたりすることもありました。

洪谷 一夫さん
昭和6年生まれ(94歳)
終戦を迎えた場所
富士見市南畑

私は6人兄弟の4番目で、3人の姉と2人の妹がいました。

父親が木工を営む傍ら、姉と妹たちが田んぼと畑を耕していました。私が、一生懸命育てた米や野菜はほとんど供出で取り上げられ、自分たちで食べるものは、ジャリジャリと砂が混じる少しの米とさつま



戦争を体験された方にお話を伺いました。紙面の都合上、お話のすべてをご紹介することはできませんが、多くの貴重な話を聞き、改めて命の尊さ、平和の大切さ、ありがたさを実感しました。

(担当/平塚嘉代子、三塚好江、洪谷真実、飯島紀、小山由佳、吉川悦子、吉川美佳)